



ちょっと素敵な話
No.21

ありがとう

私にとって、Aさんとの出会いは、人生を大きく左右するものとなりました。

Aさんは人と関わられることを拒まれ、

廊下の隅でカセットテープを聴かれています。

険しい表情で時々不意に立ち上がり、

閉まり切っていないドアを閉めに行かれる。

Aさんは自閉症という障害をお持ちでした。

Aさんが一九歳、私が二七歳の時の出会いでした。

当時のAさんは、話しかけると大きな声で怒り、叩こうとされることもしばしばでした。

他業種からの転職で、障害について全く無知であった私でしたが、今までAさんが生き辛かったであろうことは容易に想像ができました。

「なぜそんな行動になるのか」「今どんな気持ちなのか」



Aさんのこと、障害のことを知りたい。

私にできることは何か、ヒントを与えて欲しいと思う毎日でした。

「どうすればよいのか」を夢中で探しました。うまくいくことばかりではありませんでしたが、毎日が充実していました。言葉で表現されることはありませんでしたが、Aさんの嬉しいことや嫌なことが伝わってきました。なんてやりがいのある仕事なんだろうと思いました。

あつという間に二年が経ちました。

そこには、笑顔で人と関わり、言葉遊びをするAさんの姿がありました。

Aさんはいつも、ストレートに思いを示してくださいました。

Aさんはたくさんのヒントをくださいました。

この仕事で大切なことや、面白さを教えていただきました。

この仕事の尊さを教えていただきました。

旅行やハイキング、調理実習に作業…、かけがえのない思い出をいただきました。

そんなAさんともお別れの日が来ました。

私は異動で違う事業所に配属されることになりました。

最後の日、今までのお礼を言いたかったのですが、涙で言葉が詰まってしまいました。私がお見せする初めての表情でした。泣いてくしゃくしゃになった私の顔をAさんは覗き込み、困った表情をされました。でも、すぐにニコツとされ、ご自分で描かれた絵を差し出されました。

「行っておいで。」と背中を押された気分でした。

今もあの時の、Aさんの困惑の表情と笑顔が忘れられません。

Aさんとの出会いから一二年が経ちます。お別れして以来、日々を一緒に過ごすことはありませんが、時々お会いすると今も笑顔で迎えてくださいます。「そんな頃もあつたなあ」とAさんに言われそうな気がして、私はひとりニンマリします。

そして、この仕事を一生の仕事とすることができたこと、今も感謝しています。本当にありがとうございます。